



TITLE:

心理療法場面で生じる夢の実証研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

粉川, 尚枝

CITATION:

粉川, 尚枝. 心理療法場面で生じる夢の実証研究. 京都大学, 2018, 博士 (教育学)

ISSUE DATE:

2018-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21245>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	粉川 尚枝
論文題目	心理療法場面で生じる夢の実証研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、心理療法場面でクライアントにより報告される夢について、その実証研究に基づいて論じるものである。一連の研究では、心理療法に来談するクライアントの心理的テーマが、夢にどのように現れ、心理的テーマが現れた夢が心理療法過程でどのように変容していくのかを検討した。特に、心理療法過程で生じる夢において取り込まれる事例間に共通の心理的テーマや、心理的テーマの展開に繋がる夢の構造を明らかにすること、また、クライアントの持つ心の構造と夢の構造の関連を検討することを目的とした。</p> <p>夢は、夢を見た人の心的現象として、心理療法場面で継続して取り上げられてきており、日本でも、クライアントの夢を聞くことは、主要な技法として定着している。本論文では、クライアントの夢や描画などのイメージを重視する、分析心理学派の夢理論に基づいて研究を行った。分析心理学派では、クライアントが、日々の出来事を心理療法で話す時にも、パーソナリティの側面が、語られる対象に表されると考える。一方、心理療法の中で、そうした日常の語りだけでは心理療法の展開が行き詰る場合も多く、分析心理学派は、心理療法への示唆を得るために役立つものとして、夢を重要視してきた。夢の中のイメージは、本人の気づいていないことも含めての夢を見た人のパーソナリティの現れとして捉えられるため、夢には、クライアントの無意識的な心理的問題・課題が現れるとともに、解決の可能性も示されてくると考えられる。</p> <p>実際の心理療法場面では、夢の私がイメージとして現れたパーソナリティの諸側面と関わる体験から、夢見手は気づきを得ていくことが多く、夢の私と諸側面との関わりを反映する「夢の構造」の重要性が、心理療法家たちに実感されてきた。そこで、本論文では、各夢の構造を、夢の私と夢の中の対象との関係のあり方、夢の私の行為主体感の程度、夢の私と対象の関係が展開するための夢の中の場所、時間、夢の私や対象の状態の連続性から捉え、心理療法過程で生じる夢の意味を、夢の構造面から検討することを試みた。夢の構造の重要性は臨床実践の中で心理療法家達から実感されてきたものの、これまでの夢についての研究は、主に夢の内容の象徴性への着目と検討が主であり、夢の構造に関する検討はなされてこなかった。夢の内容ではなく、特に夢の構造面に着目して研究を実施したことは、本研究の独自性と考えられる。</p> <p>次に、本論文の章の構成と概要を述べる。まず、第1章で、心理療法の諸学派の夢理論について、著名な臨床家の文献から学派間の異同を検討した後、本論文が背景とする分析心理学派の夢理論の特徴を明確に示した。そして、第2章では、夢の構造面についての文化比較の試みとして、日本とドイツの事例を一事例ずつ分析し、結果を比較検討した。夢の文化差に着目した研究はこれまでほとんどなされていないため、両事例の異同から、心理療法過程で生じる夢の構造の基本的な特徴や、日本で報告された事例の夢の構造の特徴を考えるための視点を得ることを試みた。続く第3章でも、日本で報告された事例について、分析事例を増やし、より詳しく検討を行った。</p> <p>第2、3章での検討からは、夢の構造に時代差が影響する可能性も示唆されたが、心理療法の現場でも、現代社会の変容と共に、現代人の心のあり方、心理的テーマに変化が生じていると指摘されている。こうした変化と夢の構造の関連について、第4章では、一般の大学生を対象とした質問紙調査から、第5章では、複数の日本の心理療法事例のメタ的検討から研究を行った。心理療法に来談する現代のクライアントの</p>			

心のあり方、心理的テーマの変容に合わせた夢分析の視点を考えることは、心理療法場面に通じる示唆を提供する面でも、意義があると思われる。

また、第 2 章から第 5 章で得られた視点を踏まえ、第 6, 7, 8 章では、ドイツと日本で報告された事例の夢の構造について、改めて事例数を増やして分析を行い、クライアントの持つ文化的背景や、発達障害傾向の有無の視点から検討を行った。本研究で検討した複数の事例には、共通の心理的テーマが心理療法過程で語られる夢に生じることが示された。加えて、検討した日本の事例では、夢の私の成長過程に付き添う他者の存在、夢の私が対象を“見る”という行為が、心理的テーマの展開に意味を持つものとして、共通して生じた。

各章の結果を基に、終章では、心理療法過程で生じる夢の持つ意味について検討を試みた。本研究から、心理療法過程で生じる夢には、夢自我の強化に繋がる、夢の私の主体的成長のテーマが繰り返されることが明らかになり、心理療法でクライアントが夢を話すことの意味と共に、夢の構造にも着目して夢を検討する意義が示唆された。また、夢の私を通して、クライアントが気づきや内的体験を得ることも、心理療法過程で生じる夢の意味と捉えられた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、心理療法場面で報告される夢に着目し、国内外の複数の事例のメタ分析を通して、クライエントの心的課題が夢のなかにいかに現れ、そのような夢が心理療法のプロセスのなかで実際にいかに変容してゆくのかについて実証的に検討することを試みたものである。

このような本論文の在り方はそれ自体、実際の心理療法の事例に基づいているという意味で、極めて臨床的でありながら、実証的であれという要請にも応えようとしているという意味で、臨床心理学の研究において新しい地平を開くものとして高く評価できる。とりわけ、評価に値するのは、以下の3点である。

第一に評価できるのは、「文化差」に着目した点である。

第2章と第6章では、「夢の構造分析」の創案者であるドイツのユング派分析家 Christian Roesler の協力と支援により、日独両国の心理療法事例において報告された夢の構造やその心理療法経過中の変化が比較文化的な観点から論じられている。そこで見出された両者の共通点と相違点はともに大変興味深く、一例を挙げると、夢自我が成長する過程に関しては、ドイツの事例においては対象を統合するテーマが、日本の事例においては共生関係を築いてゆくテーマが夢のなかに繰り返し現れ、日本の事例においてのみ、夢自我の成長過程に付き添う他者の存在と、「見る」という対象との関わりが、重要な役割をもってその夢系列のなかで繰り返し提示されるという違いが見出されている。また、第6章では、Roesler がドイツの11事例／140の夢から抽出した5つの「夢の構造」のパターンが、日本の13事例／168の夢に、どのような頻度で心理療法の各フェーズに出現するのかが検討され、日本の事例の夢において特徴的なのは、パターンⅢ「夢自我が要求される課題をこなす」であることが見出されている。これらの結果からは、日本人の夢においては、他者と直接的に対決し統合する関係ではなく、横並びの関係や要求や課題を間に挟んだ関係が優位であることがうかがえ、このような知見が、従来の日本人のこころの在り方に関する議論やわが国において夢分析の実践を行う者の臨床的な感覚ともよく合致するものであることは、特筆に値する。第8章では、第6章で取り上げた5つの「夢の構造」のパターンには、日本人の夢に特有とも言える、上記の「夢自我が対象を見ている」「夢の中の対象主導で、夢自我が友好的に働きかけられる」が含まれなかったことに着目し、それらのパターンが日本人の事例にどのように出現するのかが検討されており、ここにも、「文化差」の観点は一貫して活かされていると言えるだろう。

第二に評価できるのは、「時代差」に着目した点である。

第3章は、第2章の分析結果に示唆された、上記のような日本人の夢の構造の特徴が、他の日本の事例にも広く認められるものかを確認するため、分析事例数を増やし、より詳しい検討が行われたものだが、第2章で分析された1970年代の日本人の事例の夢の特徴は、第3章の分析事例にも同様に見出される一方で、第3章で分析された比較的近年の事例においては、夢自我と対象の分化が主要テーマとして夢に繰り返し現れ、このような夢自我と融合状態にある他者という在り方は、第2章で日本人の事例における特徴として抽出された「夢自我の成長に付き添う他者」という在り方とは異なるものであった。このような時代的な変化は、学生相談を主たる臨床の場としている複数の精神医学者や心理学者による“断片的・多面的な自己像”に基づく他者との関係”や“悩めない”心性”といった、現代の若者のこころの構造の変化に関する概念化とも符合している。第4章は、一般の大学生を対象に質問紙調査を実施し、そのような現代の若者のこころの構造の変容が夢の構造面にどのような影響を及ぼしているのかについての数量的な検討を試みたものである。ここでは、こころの構造の変容を捉える視点として Stern の「自己感」が、夢の構造を捉える視点として「自己関係」

が取り上げられ、自己感の低さと、夢自我もしくは対象が現れない（「自己関係」が成立しない）夢の出現頻度との間に相関があることが明らかにされた。さらに、このような「時代差」への着目は、今日における「時代精神の病」とも言うべき発達障害傾向のある事例と彼らが報告する夢の構造の関連について論じた第7章にも通底しており、自己感が低いことが想定される発達障害傾向のある事例においては、先の5つの「夢の構造」で言えば、パターンⅠ「夢自我が夢の中に存在しない」の出現率が有意に高いことが明らかにされている。これらは、質問紙を用いた調査結果と心理療法の実際との重なりを示すものとして大変興味深い。

第三に評価できるのは、これまでの本論文の評価にすでに内包されているが、論文全体が極めて有機的な連なりによって紡がれているという点である。

ここまでにふれなかった第5章においても、第2・3・4章で得られた知見から探求すべきテーマを抽出し、夢のなかの他者・物・場所といった、夢のなかの対象が、クライアントの心理的テーマの展開に果たす役割を検討することが、複数の心理療法の事例のメタ分析によって行われている。これに限らず、本論文の各章の有機的な連なりの果てに据えられた終章「心理療法過程で生じる夢の意味」は、十分な説得力をもって、今後の研究の展開を予示するものであったと言えるだろう。

口頭試問では、自験例が取り扱われていないことや事例のメタ分析であっても「数」はより増やす必要があること、発達障害の事例については報告数自体が少ないため、結果と考察に偏りが生じた可能性があること等について議論された。しかしながら、これらは、本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ臨床心理学領域の研究者、そして心理臨床家としての著者の今後のさらなる発展のための課題とされるべきものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年3月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降